

2026年1月16日
半導体、米国株りそなホールディングス 市場企画部
ストラテジスト 武居 大暉

日米欧 Market View: 2026年1月半導体市場及びハイテク株動向

半導体市場はAI向けが牽引し拡大。ナスダック100は上昇余地大だが、センチメント悪化が重荷

要約

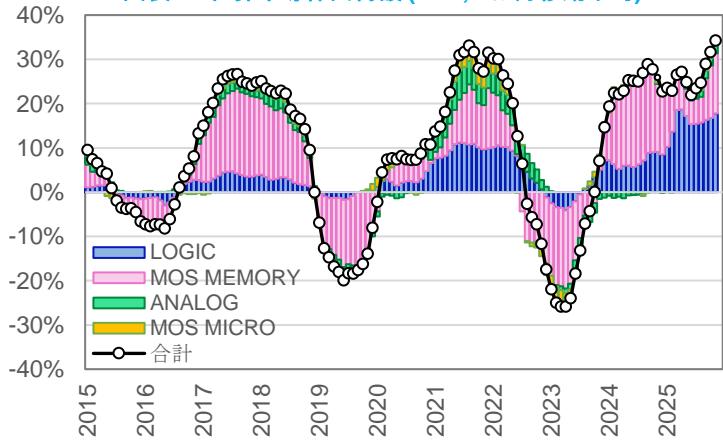
- WSTSによると、11月の世界半導体出荷額(振れが大きいため3ヵ月移動平均値)は、前年比+34.2%(前月:+31.6%)と前月から加速し、引き続き高水準(図表1)。AIへの注目が集まる中、その恩恵を受けやすいLOGICやMEMORYが市場の成長をけん引
- ナスダック100は、予想EPSは改善を続けているが、高警戒感からバリュエーションが縮小している。ファンダメンタルズは底堅いため、下値は限定的とみるが、悲観と楽観が交錯し、レンジ相場を形成しよう
- 今後一ヵ月程度の妥当レンジは、24,000pt~26,500pt程度

11月の半導体市場動向:引き続きAI向け需要が旺盛

WSTS(世界半導体市場統計)によると、11月の世界半導体出荷額(振れが大きいため3ヵ月移動平均値)は、前年比+34.2%(前月:+31.6%)と前月から加速し、引き続き高水準(図表1)。ベースラインが高くなる中、成長率が高水準を維持していることは、AIブームが持続していることを示唆している。実際、計算処理に用いられ、生成AIのトレーニングに必須のLOGICは前年比+44.1%(前月+42.2%)、データの保存に用いられ、計算スピードの効率性を決定づけるMEMORYは前年比+44.8%(前月+38.2%)であった。

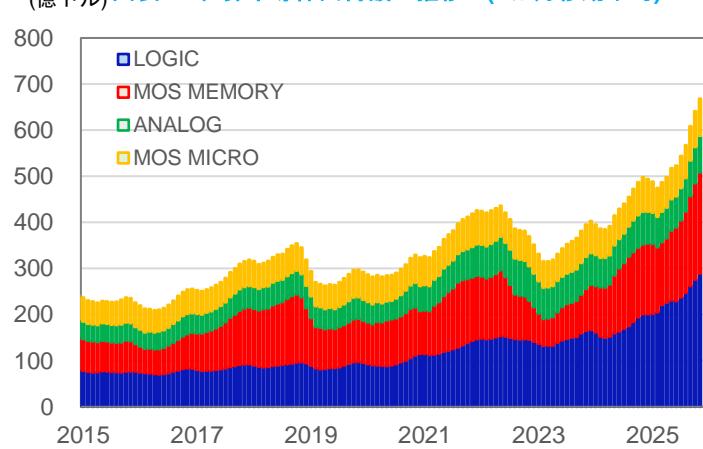
今後を展望すると、米ハイパースケーラーの投資が継続する限り、先端半導体が半導体市場全体を牽引するとみている。直近決算では、各社のAI投資への積極姿勢が確認された。ただし、以前は営業CFを投資に回していたが、社債を発行する企業も散見され、一部ではAIバブルではないかとの懸念も生じている点には留意。筆者は楽観的見通しを持っているが、中期的にはこうした懸念が社債利回りの上昇を招き、AI投資が減速することを危惧している。

図表1: 世界半導体出荷額(YoY, 3ヵ月移動平均)



出所:WSTS

図表2: 世界半導体出荷額の推移(3ヵ月移動平均)



出所:WSTS

◎注意事項

お問い合わせは、取引店の担当者までご連絡ください。

当資料に記載された情報は信頼に足る情報源から得たデータ等に基づいて作成しておりますが、その内容については明示されていると否とにかかわらず、弊社がその正確性、確実性を保証するものではありません。また、ここに記載された内容が事前の連絡なしに変更されることもあります。また、当資料は情報提供を目的としており、金融商品等の売買を勧誘するものではありません。取引時期などの最終決定はお客様ご自身の判断でなされるようお願い致します。

主要企業の動向:TSMCは単月での過去最高を更新中

■メモリ市況

従来は計算処理を担うLOGICがボトルネックとみられてきたが、足元でMEMORYの重要性が増している点は特筆に値する。LOGICの重要性は揺らいでいないが、AIトレーニングにおけるモデルサイズの巨大化によって、GPUあたりのメモリ消費量が著しく増加している。エヌビディアの資料によれば、旧製品に比べて最新の製品ではメモリ消費量が3.6倍にまで増加していることが示されている(図表3)。

MEMORYの出荷額は、その需給によって大きく増減する傾向にあったが、AIブームを背景に底堅い伸びが期待できよう。主要メモリメーカーのマイクロンの業績を確認すると(図表4)、近年は売上高

図表3:エヌビディアの製品別MEMORY半導体使用量

High bandwidth memory features

- Max capacity: 288 GB, 3.6x increase over H100
- HBM configuration: 12 stacks, 16 x 512-bit controllers (8,192-bit total width)
- Bandwidth: 8 TB/s per GPU, 2.4x improvement over H100 (3.35 TB/s)

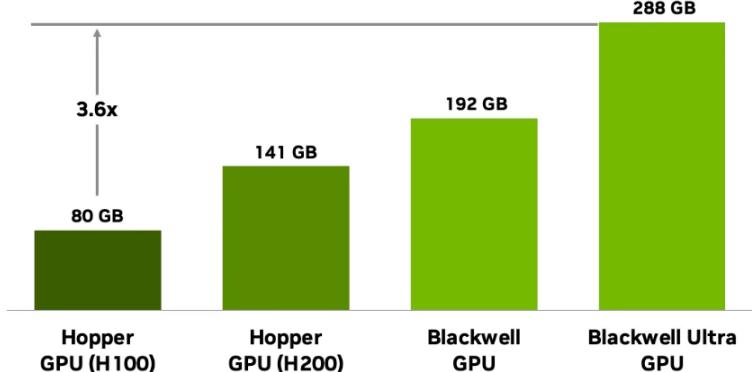
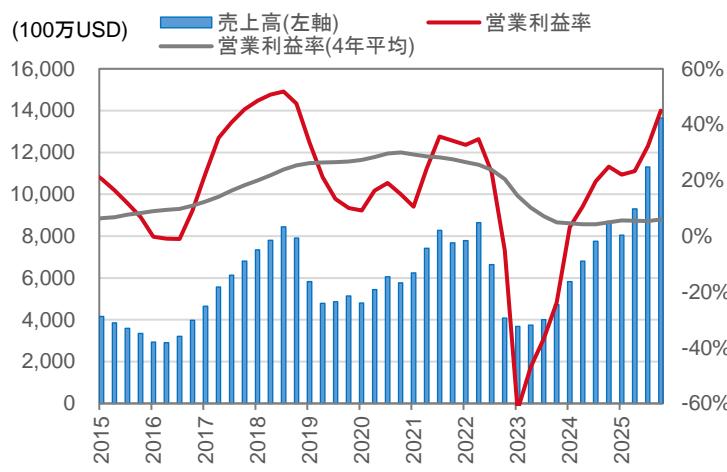


Figure 5. HBM capacity scaling across GPU generations

出所: エヌビディアの会社資料

図表4:マイクロンの四半期業績



注: 従来、シリコンサイクルは概ね4年周期であった

出所: Bloomberg

■ファウンドリ・ハイパースケーラーの動向

台湾の半導体受託生産大手TSMCは、12月単月での売上高は過去最高を更新した(図表5)。また、前年比は+24.5%と引き続き高水準。成長率がやや鈍化傾向であるが、ベース効果によるところが大きく、AIブームの陰りを示唆するものではない。TSMCの売上高のうち、22%程度がアップル、13%程度がエヌビディア、4%程度がブロードコムやアマゾンであること(図表6)、アップルは中国を中心に業績不振に苦しんでいること等を考慮すると、TSMCの売上高が堅調なのは、AI関連の先端半導体需要が旺盛であることを示唆しているよう。

実際、主要顧客であるハイパースケーラー(アマゾン、メタ、アルファベット、マイクロソフト、オラクル)は、巨額の営業CFの大半を投資に回している。一部企業は、それに加えて社債を発行して巨額投資を継続していることもあり、ハイパースケーラーの設備投資額は前年比高水準を維持(図表8)。ただし、信用リスクを示す各社のCDSについて、オラクルが水準、上昇スピード共に突出しているが、いずれの企業も昨年9月以降に上昇し、高止まりしている点には留意。AIバブル懸念が依然として燻っていることを示唆している。筆者はAIバブル懸念を杞憂と考えているが、今後、こうした懸念の高まりが各社の投資意欲を削ぎ、自己実現的にAIバブルが崩壊することを危惧している。

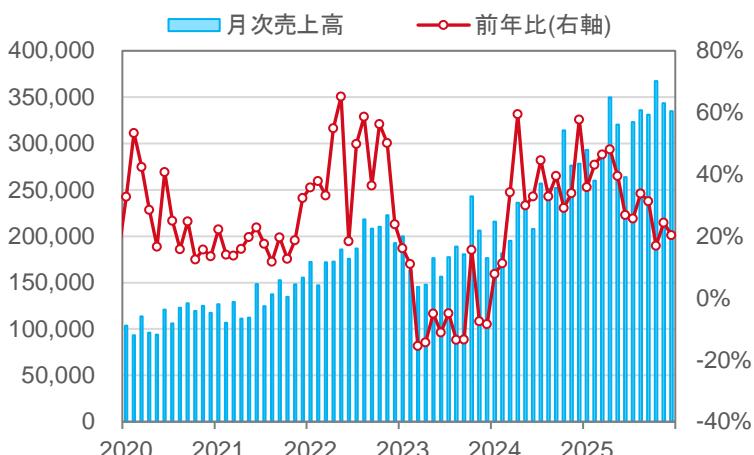
◎注意事項

当資料に記載された情報は信頼に足る情報源から得たデータ等に基づいて作成しておりますが、その内容については明示されていると否とにかかわらず、弊社がその正確性、確実性を保証するものではありません。また、ここに記載された内容が事前の連絡なしに変更されることがあります。また、当資料は情報提供を目的としており、金融商品等の売買を勧誘するものではありません。取引時期などの最終決定はお客様ご自身の判断でなされるようお願い致します。



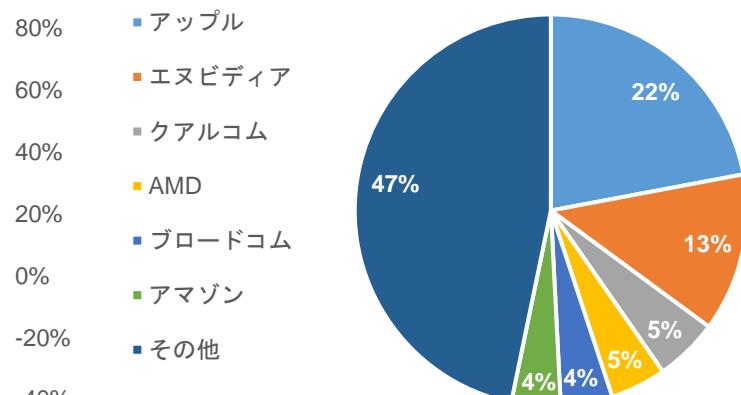
(百万TWD)

図表5：TSMCの月次売上高



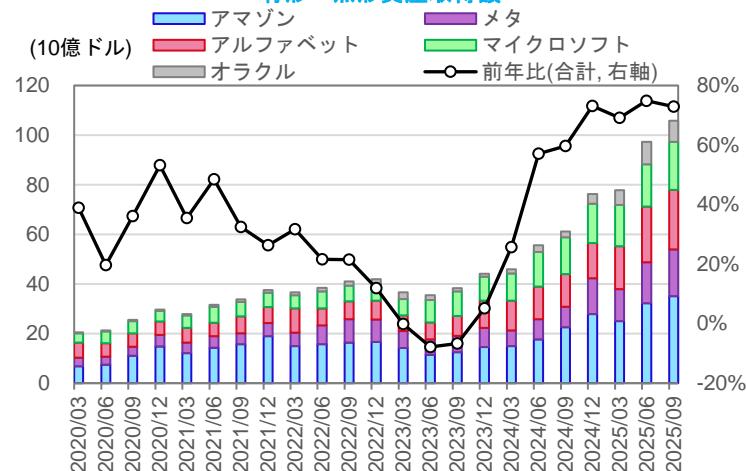
出所：TSMC の会社資料

図表6：TSMCの顧客別売上高構成比



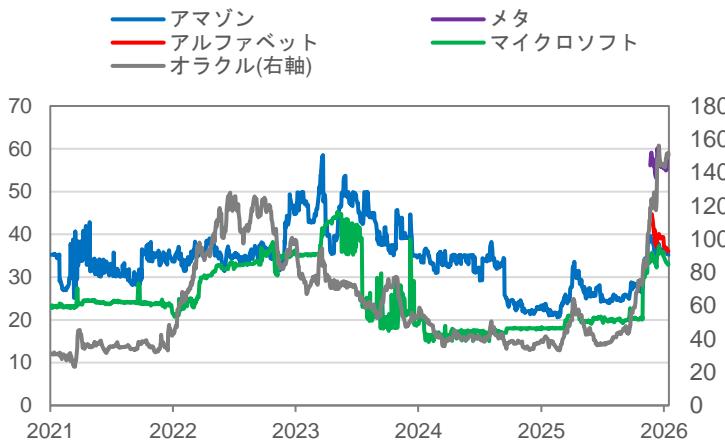
出所：Bloomberg

図表7：米ハイパースケーラーの有形・無形資産取得額



出所：Bloomberg

図表8：米ハイパースケーラーのCDS



出所：Bloomberg

ハイテク株(ナスダック 100)のバリュエーションと短期見通し:大型株を中心に上昇余地あり

図表9は、ナスダック100の23年末以降の株価騰落要因分解である。ナスダック100は、11月に入ってから、主要ハイテク株を中心にAIバブル懸念等からやや調整色を強めているが、予想EPSは改善を続けているため、PERが切り下がっている。

ナスダック100は割安感が強まっており、主要国指数のPBR-ROEマトリクスを見ると、傾向線を下回っている様子が確認できる(図表10)。さらに、主要国指数のPBR-ROEマトリクスにおける、傾きと定数項の推移をみると、2025年10月以降に、傾きの低下傾向と定数項の上昇傾向に転じたことが確認できる(図表11)。傾きの低下は、ROEに対する市場の評価が低下していることを示唆する。一方で、定数項の上昇は、市場全体としてPBR水準が切り上がっていることを示唆する。リスクセンチメントは高いものの、投資家はハイテク株を忌避し、それ以外のセクターへ投資している様子を示唆しているよう。

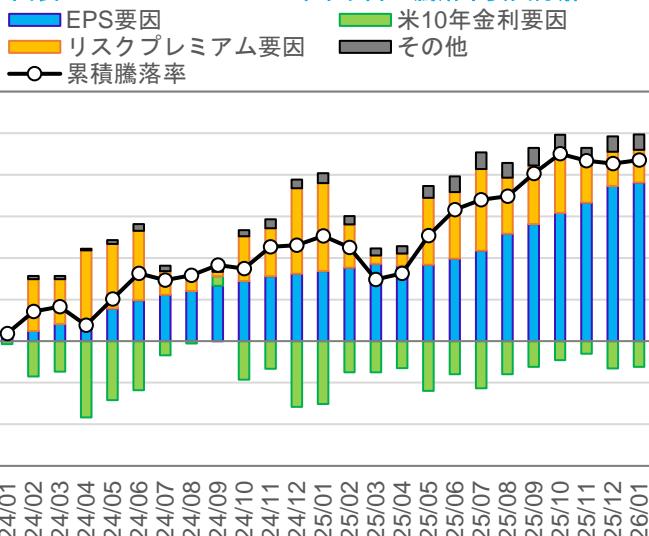
◎注意事項

当資料に記載された情報は信頼に足る情報源から得たデータ等に基づいて作成しておりますが、その内容については明示されていると否とにかかわらず、弊社がその正確性、確実性を保証するものではありません。また、ここに記載された内容が事前の連絡なしに変更されることがあります。また、当資料は情報提供を目的としており、金融商品等の売買を勧誘するものではありません。取引時期などの最終決定はお客様ご自身の判断でなされるようお願い致します。

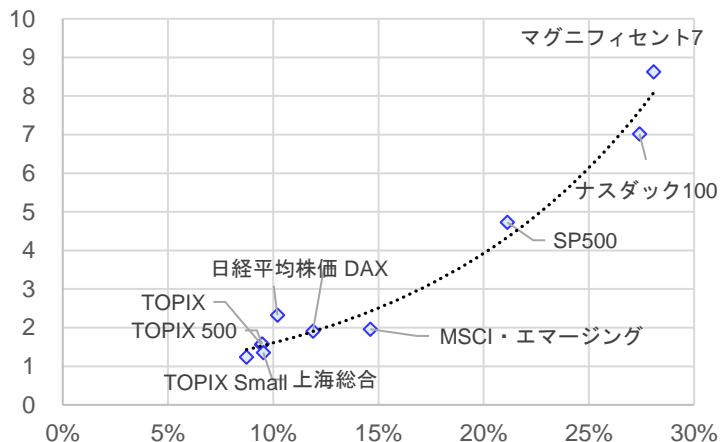
繰り返しになるが、筆者はAIバブルを巡る懸念は杞憂であると考えているが(補足参照)、弱気派の懸念する過剰投資問題等は短期的に懸念が払拭される様な性質の問題ではない。このため、ハイテク株はAIバブル懸念による調整と楽観的見方を背景とする上昇を繰り返すとみている。もっとも、後述する様にAI半導体を中心に半導体市場の先行きは明るく、予想EPSは改善を続ける公算が大きい。従って、株価調整局面は押し目買いの好機とみる。

NASDAQ100の今後1ヵ月程度の想定レンジは24,000pt~26,500pt(図表12)。ファンダメンタルズは底堅いため、下値も限定的だが、悲観と楽観が交錯してレンジ相場になるとみている。

図表9：NASDAQ100の23年末以降の騰落率要因分解

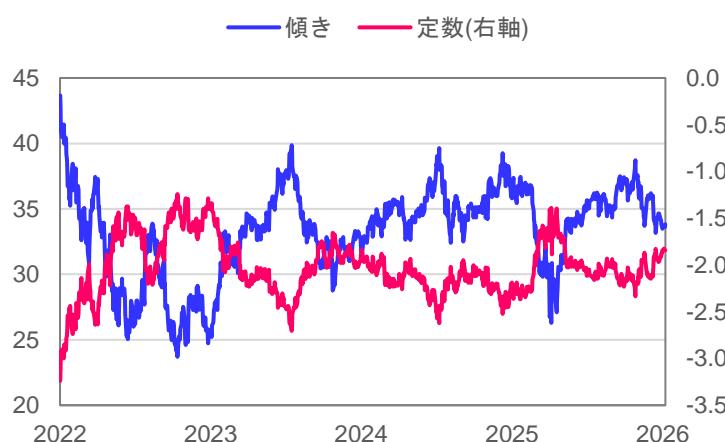


図表10：PBR-ROEマトリクス



出所：Bloomberg

図表11：PBR-ROEマトリクスにおける係数の推移



図表12：NASDAQ100のバリュエーション

予想EPS	予想PER							
	24.0倍	24.5倍	25.0倍	現状	25.5倍	26.0倍	26.5倍	27.0倍
10.0%	1100.0	26,400	26,950	27,500	28,013	28,599	29,149	29,699
5.0%	1050.0	25,200	25,725	26,250	26,739	27,300	27,825	28,349
3.0%	1030.0	24,720	25,235	25,750	26,230	26,780	27,295	27,810
1.0%	1010.0	24,240	24,745	25,250	25,721	26,260	26,765	27,270
現状	1000.0	24,000	24,500	25,000	25,466	26,000	26,500	27,000
-1.0%	990.0	23,760	24,255	24,750	25,211	25,740	26,235	26,730
-3.0%	970.0	23,280	23,765	24,250	24,702	25,220	25,705	26,190
-5.0%	950.0	22,800	23,275	23,750	24,193	24,700	25,175	25,650
-10.0%	900.0	21,600	22,050	22,500	22,919	23,400	23,850	24,300

出所：Bloomberg

◎注意事項

当資料に記載された情報は信頼に足る情報源から得たデータ等に基づいて作成しておりますが、その内容については明示されていると否とにかかわらず、弊社がその正確性、確実性を保証するものではありません。また、ここに記載された内容が事前の連絡なしに変更されることもあります。また、当資料は情報提供を目的としており、金融商品等の売買を勧誘するものではありません。取引時期などの最終決定はお客様ご自身の判断でなされるようお願い致します。

図表 13：主要ハイテク企業のバリュエーション

区分	企業名	前月比	前年比	PBR	PER	ROE	主な事業・特徴
① 製造装置（前工程）	ASMLホールディングス	+26.1%	+80.1%	18.4	42.1	43.8%	EUV露光装置で独占的地位
	アプライド・マテリアルズ	+24.4%	+76.9%	10.8	31.6	34.2%	成膜・エッチング装置世界最大手
	ラムリサーチ	+26.2%	+168.3%	20.2	40.2	50.4%	エッチング・成膜装置
	東京エレクトロン	+35.4%	+61.2%	8.6	34.2	25.1%	前工程装置国内最大手
	KLA	+24.0%	+109.3%	29.3	38.8	75.5%	検査・計測装置世界首位
	SCREENホールディングス	+38.5%	+62.2%	3.1	16.8	18.4%	洗浄装置などで高シェア
② 製造装置 (後工程・パッケージング ・テスト)	レーザーテック	+28.2%	+136.3%	11.9	41.7	28.6%	EUVマスク検査で独占的地位
	アドバンテスト	+17.2%	+159.8%	20.0	48.2	41.4%	SoCテスター世界首位
	テラダイン	+16.7%	+96.6%	10.8	43.0	25.0%	メモリ/SOCテスト装置大手
	ディスコ	+34.9%	+34.8%	10.0	44.0	22.8%	ダイシングソーで世界トップ
③ 材料・部材	TOWA	+50.4%	+43.2%	3.0	26.6	11.3%	モールド装置・後工程の自動化
	信越化学工業	+17.4%	+15.2%	2.3	19.9	11.5%	シリコンウェーハ・レジスト
	HOYA	+6.6%	+21.1%	8.3	34.8	23.8%	EUVマスクブランクス・光学部材
④ ファウンドリ	東京応化工業	+13.4%	+82.4%	3.2	23.1	13.9%	フォトレジスト
	台湾積体電路製造(TSMC)	+18.2%	+63.2%	7.9	25.6	30.9%	世界最大の受託生産
	グローバルファウンドリーズ	+13.4%	+0.1%	1.8	22.0	8.2%	米国中心のファウンドリ
⑤ IDM（垂直統合）	サムスン電子	+39.6%	+184.0%	1.9	9.3	20.4%	メモリ+ロジック両輪
	インテル	+31.2%	+148.7%	2.0	73.9	2.8%	CPU+ファウンドリ化転換中
	テキサス・インスツルメンツ	+7.3%	+2.4%	0.1	30.1	33.6%	アナログ半導体
	マイクロン・テクノロジー	+26.6%	+269.0%	3.7	9.6	38.4%	DRAM・NAND
⑥ ファブレス	SKハイニックス	+37.8%	+278.5%	2.8	7.1	39.8%	DRAM・NAND
	エヌビディア	+3.3%	+55.8%	16.3	24.6	66.1%	GPU・AIチップの中核
	ブロードコム	+0.8%	+55.0%	13.7	31.8	43.2%	通信・ネットワーク半導体
	アドバンスト・マイクロ・デバイセズ	+6.8%	+96.6%	5.4	33.8	16.0%	CPU・GPU両輪
	クアルコム	+7.9%	+6.7%	6.8	13.2	51.3%	モバイルSOC・通信モデム
⑦ EDA / IP	マーベル・テクノロジー	+4.4%	+28.8%	4.3	22.6	18.8%	データセンター・通信向け
	シノブシ	+9.6%	+3.3%	3.1	34.1	9.0%	設計支援ソフトEDA首位
	ケイデンス・デザイン・システムズ	+1.8%	+7.7%	13.5	39.7	33.9%	EDA2位・IPライセンス
⑧ クラウド/ AIプラットフォーマー	アーム・ホールディングス	+7.8%	+34.1%	11.0	48.6	22.7%	CPUアーキテクチャ設計
	マイクロソフト	+6.0%	+10.0%	6.8	26.0	26.0%	Azure、AIサーバー需要
	アルファベット	+3.0%	+62.0%	7.8	27.9	28.1%	TPUなど自社AIチップ開発
	アマゾン・ドット・コム	+4.8%	+0.2%	5.2	25.3	20.7%	AWS用チップ設計・AI投資
	オラクル	+1.1%	+11.6%	11.6	24.3	47.6%	自社SoC（Mシリーズ）開発
	メタ・プラットフォームズ	+5.8%	+9.9%	5.2	18.2	28.4%	自社AIチップ開発・HPC投資

出所：Bloomberg

ハイテク株(ナスダック 100)の中期見通し：AI 関連企業を中心に底堅く推移しよう

図表 14 は、WSTS が公表した 2026 年までの世界半導体出荷額見通しである。半年前と比べて、2025 年、2026 年のいずれも、それぞれ +10.8%、+31.0% 上方修正されている、けん引役は、AI 半導体に関連する Logic 及び Memory である。WSTS 見通しをやや保守的に打ち出す傾向があり、来年にかけては一層の上昇余地があるとみられる。

もっとも、この保守的な予想を使用してもハイテク株は上昇余地が大きい。図表 15 に示した様に、半導体出荷額の前年比とナスダック 100 の EPS の前年比には正の相関関係がある。両者の関係からナスダック 100 の 2026 年の EPS を予想すると、なさ 100 は PER が変わらずとも、EPS(=ファンダメンタルズ)の改善のみで 32,000pt 程度に到達する可能性がある。

リスクは、AI バブル懸念である。筆者は現状を AI バブルではないと考えているが、投資家が懐疑的となれば、AI 投資のための社債発行等がネガティブと評され、利回りが上昇するなどして、企業は AI 投資に消極的となる可能性がある。

◎注意事項

当資料に記載された情報は信頼に足る情報源から得たデータ等に基づいて作成しておりますが、その内容については明示されていると否とにかかわらず、弊社がその正確性、確実性を保証するものではありません。また、ここに記載された内容が事前の連絡なしに変更されることもあります。また、当資料は情報提供を目的としており、金融商品等の売買を勧誘するものではありません。取引時期などの最終決定はお客様ご自身の判断でなされるようお願い致します。

図表 14 : WSTS による世界半導体出荷額見通し

単位:10億ドル

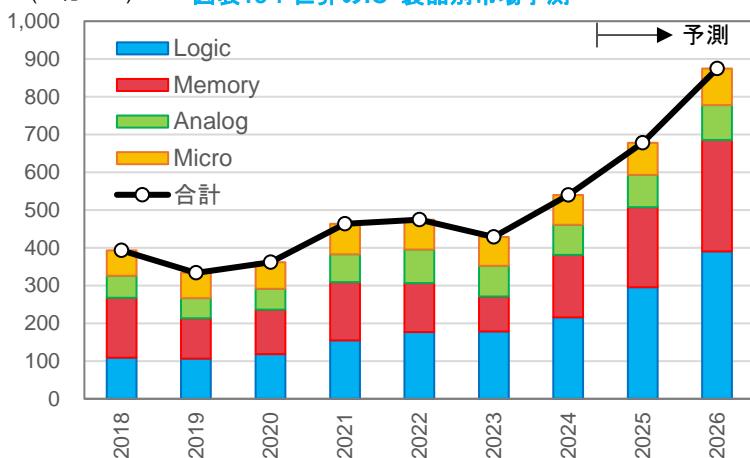
⇒予想

	2018	2019	2020	2021	2022	2023	2024	2025	2026
合計	393,288	333,354	361,226	463,001	474,401	428,442	539,505	677,852	874,291
Analog	58,785	53,939	55,658	74,105	88,983	81,225	79,588	85,552	91,988
Micro	67,233	66,440	69,678	80,221	79,073	76,340	78,633	84,839	96,620
Logic	109,303	106,535	118,408	154,837	176,578	178,589	215,768	295,892	390,863
Memory	157,967	106,440	117,482	153,838	129,767	92,288	165,516	211,568	294,821
前年比									
合計	-15.2%	8.4%	28.2%	2.5%	-9.7%	25.9%	25.6%	29.0%	
Analog	-8.2%	3.2%	33.1%	20.1%	-8.7%	-2.0%	7.5%	7.5%	
Micro	-1.2%	4.9%	15.1%	-1.4%	-3.5%	3.0%	7.9%	13.9%	
Logic	-2.5%	11.1%	30.8%	14.0%	1.1%	20.8%	37.1%	32.1%	
Memory	-32.6%	10.4%	30.9%	-15.6%	-28.9%	79.3%	27.8%	39.4%	
前回予想からの修正率									
合計							10.8%	31.0%	
Analog							4.8%	7.5%	
Micro							9.0%	20.5%	
Logic							10.7%	36.3%	
Memory							14.5%	37.2%	
ナスダック100									
株価	6,980	7,706	10,385	14,547	12,631	14,430	19,161	24,487	31,896
前年比	10.4%	34.8%	40.1%	-13.2%	14.2%	32.8%	27.8%	30.3%	

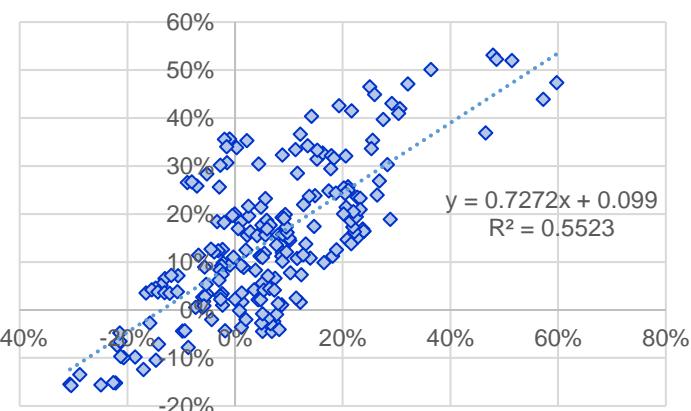
出所:WSTS

(10億ドル)

図表15 : 世界のIC 製品別市場予測



図表16 : 世界半導体出荷額(前年比)とナスダック100EPS(前年比)



出所 : WSTS

出所 : Bloomberg

◎注意事項

当資料に記載された情報は信頼に足る情報源から得たデータ等に基づいて作成しておりますが、その内容については明示されていると否ともにかかるらず、弊社がその正確性、確実性を保証するものではありません。また、ここに記載された内容が事前の連絡なしに変更されることもあります。また、当資料は情報提供を目的としており、金融商品等の売買を勧説するものではありません。取引時期などの最終決定はお客様ご自身の判断でなされるようお願い致します。



補足:AI バブル懸念に対する考え方の整理

AI ブームには懐疑的な声も多く、循環取引や過剰投資懸念が指摘されており、ハイテク企業の株価はボラタイルな値動きをしている。しかし、過去の技術革新が生じた際にブームが持続した期間を考えると AI ブームはまだ持続する公算が大きい。また、バブルを指摘する意見は生成 AI 領域に終始している印象だが、フィジカル AI を始めとして、AI の応用可能性は多岐に渡り、新たな需要も創出されているため、現時点でバブルと判断することは時期尚早であると考えている。

図表 17 は、19 世紀以降の主要インフラ産業について、どの様な末路を辿ったか整理したものである。各産業に共通するのは、①技術革新による需要創出、②投資ラッシュ、③供給過剰局面、④淘汰と寡占化、⑤長期安定期への移行というサイクルである。ただし、このサイクルが現れる速度や振り戻しの大きさは、産業が依拠する基盤の性質(物理インフラか、ソフトウェア中心か、規制産業か等)によって大きく異なる。

鉄道や鉄鋼などの物理インフラは、資本集約度が高く、供給調整に時間がかかるため、投資過剰が顕在化するまでの期間が長い。一方、通信機器やインターネット企業は、技術陳腐化が早く、期待が先行しやすいため、投資拡大期から調整局面までのサイクルが短期化する。この点は、2000 年の通信バブル崩壊や Web1.0 バブルで顕著である。

これに対し、AI 関連産業は、従来型の IT 投資と同列には扱えない。AI 市場は、LLM、ロボティクス、自動運転、産業 AI、動画生成 AI など複数の需要源が存在し、計算需要の拡大メカニズムも、従来のソフトウェア産業より非連続性が大きい。GPU・データセンター投資がハイパースケーラーに集中するという構造自体はクラウド産業に似るが、需要の多極化によって単一用途の飽和が即座に全体の縮小につながる構造ではない点が特徴的である。

AI については、現時点では依然として投資拡大期に位置し、産業構造が定常状態に収束するまでの時間軸は読みづらい。特にロボティクスや自動運転などの領域は、実装フェーズが 2020 年代後半まで続くと見られるため、現行の GPU 投資拡大を単純にクラウド投資サイクルと同一視することには無理がある。

以上の比較により、AI 産業に対する「バブル論」の一部は、需要源を LLM のみに限定し、その多層構造を適切に評価できていないことが確認できる。一方で、ハードウェア投資が短期的に過熱している可能性は否定できず、今後は「過剰投資の顕在化」と「新規需要の開拓」のどちらが上回るかが、企業収益および産業全体の成長速度を規定すると考えられる。加えて、生成領域に限っても、バブルであるか否かを短期的に判定することは難しく、2026 年の相場見通しを語る上の重要性は低いと考えている。

◎注意事項

当資料に記載された情報は信頼に足る情報源から得たデータ等に基づいて作成しておりますが、その内容については明示されていると否とにかかわらず、弊社がその正確性、確実性を保証するものではありません。また、ここに記載された内容が事前の連絡なしに変更されることがあります。また、当資料は情報提供を目的としており、金融商品等の売買を勧誘するものではありません。取引時期などの最終決定はお客様ご自身の判断でなされるようお願い致します。



図表 17：過去の技術革新と主要企業

期間	産業カテゴリ	注目の契機	代表企業	株価推移
1840-1870	鉄道	大陸横断鉄道完成(1869年) 蒸気機関の進化と投資ラッシュ	UnionPacific、CentralPacific	初期投資ブームで急騰→過剰供給とバニックで大暴落(1873年恐慌)→統合後、長期安定成長(インフラ化)
1950-1990	鉄鋼(高炉技術進化)	戦後復興・ベビーブーム需要 連続鋳造法普及(1960s) グローバル輸出拡大	USSSteel、NipponSteel、 POSCO、Baosteel	戦後高度成長期に急騰(USSSteel株価数倍)→1970sオイルショックで調整→1980s再上昇も競争激化で周期的下振れ(戦略的保護政策で安定、2025年USSSteel買収合意で国家安全保障強調)
1980-2000	半導体(汎用→PC→モバイル)	ムーアの法則の加速 PC普及(1980s)	Intel、TSMC、NVIDIA、AMD	複数サイクルで急成長(1990s急騰)→ドットコム調整で一時暴落(2000年)→モバイル需要で再上昇、勝者(NVIDIA等)が長期支配(2025年AIエッジ需要でNVDA+150%)
1990-2002	通信インフラ(光ファイバー・ネットワーク)	インターネット普及 ISP拡大 光ファイバー投資ブーム	Cisco、Nortel、Lucent	1990s後半に急騰(Cisco株価数百倍)→バブル崩壊で大暴落(2000-2002年)、多く破綻→生存者(Cisco)は安定回復
1995-2005	インターネット(Web1.0)	eコマース・検索エンジンの出現 プラウザ戦争(Netscape上場1995年)	Amazon、Google、eBay、 Yahoo	期待先行で高騰(1990s後半)→ドットコムバブル崩壊で淘汰(2000年)→勝者(Amazon、Google)は爆発的成長継続、時価総額世界トップへ
2005-2015	モバイル/アプリエコノミー	iPhone発売(2007年) アーバンストアの普及 4Gネットワーク展開	Apple、Google、Qualcomm	初期急騰(Apple株価10倍超)→競争激化で調整→プラットフォーム勝者(Apple、Google)が長期支配、関連ハード(Qualcomm)も安定成長
2010-2024	クラウドコンピューティング(IaaS/PaaS)	AWS商用成功(2006年、黒字化2015年頃) 企業DX加速	Amazon、Microsoft、Google	巨額投資期の緩やか上昇→スケールメリットで急加速(2010s後半)→安定高収益化、親会社株(MSFT、AMZN)が長期急騰(2025年AI需要で継続)
2020-	AI(生成AI/LLMブーム)	GPT-3公開(2020年) ChatGPT爆発的普及(2022年) Transformer/マルチモーダル進化	OpenAI、NVIDIA、Meta、Google	PoC投資ラッシュからGPU/クラウド需要で急騰(NVIDIA株価数倍、2023-2025)→マネタイズ不透明のボラ高も、 AgenticAIシフトで継続上昇→勝者総取りの可能性高(BigTech支配)
2023-	AI(ロボティクス/自動運転：物理AI)	TeslaOptimusデモ(2023年) Waymo商用無人運転拡大 FSD進展 NVIDIARobotBrain(2025年)	Tesla、Alphabet、 BostonDynamics、NVIDIA	期待先行で変動大(Tesla株価ボラ高、2025年+80%)→実証失敗リスクで調整も、市場規模\$5.23B(2025年)・CAGR32%で加速→成功シナリオで爆発成長(インフラ化、2030年\$50B超?)
2024-	AI (マルチモーダル/エージェント/ワールドモデル)	Sora動画生成(2024年) Copilot企業実装 RAG/エージェントツール普及 ワールドモデル商用化(2025年：NVIDIA Cosmos等)	Microsoft、Google、OpenAI、 Adobe、Meta、NVIDIA	生成ツール需要でハード/クラウド株再上昇→企業定常化で安定(MSFT等)→過剰投資リスクで調整も、 AgenticAI/Embodied統合で\$500B超市場化の可能性(模擬環境トレーニングで物理AI強化)

出所：各種報道より、りそなホールディングス作成

◎注意事項

当資料に記載された情報は信頼に足る情報源から得たデータ等に基づいて作成しておりますが、その内容については明示されていると否とにかかわらず、弊社がその正確性、確実性を保証するものではありません。また、ここに記載された内容が事前の連絡なしに変更されることもあります。また、当資料は情報提供を目的としており、金融商品等の売買を勧誘するものではありません。取引時期などの最終決定はお客様ご自身の判断でなされるようお願い致します。



■バックナンバー(直近発行レポート 50 本)

No	発行日	テーマ	タイトル
268	2025/9/12	欧州経済	ECB<欧州中央銀行>理事会
269	2025/9/18	米経済, 米金利, 米国株	9月 FOMC とマーケットへの影響
270	2025/9/18	豪州経済	25年9月豪州概況
271	2025/9/19	日本株	ここもとの日本株上昇相場についての考察～日経平均 4万5000円は妥当か
272	2025/9/22	日本株	日本株需給(9月8日～9月12日)
273	2025/9/29	日本株	日本株需給(9月16日～9月19日)
274	2025/9/30	コモディティ	25年8・9月 WTI 原油先物価格
275	2025/10/1	日本株	日本株9月レビューと10月見通し
276	2025/10/2	欧州経済	25年9月ユーロ圏物価動向
277	2025/10/2	米国株, 米国経済	9月 ISM 製造業景況感指数と米国株見通し
278	2025/10/3	日本株	日本株需給(9月22日～9月26日)
279	2025/10/6	日本株, ドル円	高市氏勝利とマーケットへの影響
280	2025/10/10	半導体, 日本株, 米国株	10月半導体市場及びハイテク株動向
281	2025/10/10	日本株	日本株需給(9月29日～10月3日)
282	2025/10/16	豪州経済	25年10月豪州概況
283	2025/10/20	日本株	日本株需給(10月6日～10月10日)
284	2025/10/24	日本株	日本株需給(10月14日～10月17日)
285	2025/10/30	米国経済	10月 FOMC とマーケット環境の整理
286	2025/10/31	欧州経済	ECB<欧州中央銀行>理事会
287	2025/10/31	日本株	日本株需給(10月20日～10月24日)
288	2025/10/31	欧州経済	25年第3四半期ユーロ圏 GDP 統計
289	2025/11/4	欧州経済	25年10月ユーロ圏物価動向
290	2025/11/4	日本株	日本株10月レビューと11月見通し
291	2025/11/5	米国株, 米国経済	11月 ISM 製造業景況感指数と米国株見通し
292	2025/11/11	日本株	日本株需給(10月27日～10月31日)
293	2025/11/14	日本株	日本株需給(11月4日～11月7日)
294	2025/11/14	半導体, 日本株, 米国株	11月半導体市場及びハイテク株動向
295	2025/11/14	豪州経済	11月豪州概況
296	2025/11/20	半導体, 日本株, 米国株	エヌビディアの決算 FY2026 3Q
297	2025/11/21	米国経済	9月米雇用統計
298	2025/11/21	日本株	日本株需給(11月10日～11月14日)
299	2025/11/25	欧州経済	25年第3四半期ユーロ圏賃金動向
300	2025/11/26	米国経済	米国消費関連指標とマーケット見通し
301	2025/11/28	コモディティ	25年10・11月 WTI 原油先物価格
302	2025/11/28	日本株	7-9月期決算集計と日本株ストラテジー～日経平均株価は25年度に6万円に達する可能性もあるう
303	2025/12/1	日本株	日本株需給(11月17日～11月21日)
304	2025/12/1	日本株	日本株11月レビューと12月見通し
305	2025/12/3	欧州経済	25年11月ユーロ圏物価動向
306	2025/12/5	日本株	日本株需給(11月25日～11月28日)と Weekly データ集
307	2025/12/11	コモディティ	25年12月豪州概況
308	2025/12/12	日本株	12月 FOMC とマーケット環境の整理
309	2025/12/12	日本株	日本株需給(12月1日～12月5日)と Weekly データ集
310	2025/12/15	日本株	12月半導体市場及びハイテク株動向
311	2025/12/15	欧州経済	2026年の日本株ストラテジー
312	2025/12/17	米国経済	11月米雇用統計
313	2025/12/19	欧州経済	ECB<欧州中央銀行>理事会
314	2025/12/19	日本株	日本株需給(12月8日～12月12日)と Weekly データ集
315	2025/12/19	日本株	円金利の上昇が日本株に与える影響
316	2026/1/5	日本株	日本株12月レビューと1月見通し
317	2026/1/7	日本株	日本株需給(12月22日～12月26日)と Weekly データ集

◎注意事項

当資料に記載された情報は信頼に足る情報源から得たデータ等に基づいて作成しておりますが、その内容については明示されていると否にかかわらず、弊社がその正確性、確実性を保証するものではありません。また、ここに記載された内容が事前の連絡なしに変更されることもあります。また、当資料は情報提供を目的としており、金融商品等の売買を勧誘するものではありません。取引時期などの最終決定はお客様ご自身の判断でなされるようお願い致します。